

早稲田大学環境総合研究センター(WERI)  
早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター

## 第 10 回ふくしま学(楽)会

ふくしまから伝えたいこと、  
知らなければいけないこと。

### 報告書



日 時: 2022 年 7 月 31 日 10:30-18:15  
会 場: Zoom ミーティング、福島県富岡町文化交流センター・学びの森  
主 催: 早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター  
早稲田大学レジリエンス研究所(WRRI)  
共 催: 福島県広野町  
後 援: 公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構  
双葉地方町村会  
早稲田大学アジア太平洋研究センター(WIAPS)  
早稲田大学環境総合研究センター(WERI)

2022 年 9 月 15 日

【参加者数:113人】

<プログラム>

総合司会:阿部加奈子(福島県広野町役場)

【開会挨拶】 10:30-10:45

山本育男(福島県富岡町・町長)

遠藤 智(福島県広野町・町長)

松岡俊二(早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター・センター長)

【第1部 1F 廃炉の先を考える】 10:45-12:35

司会:森口祐一(国立研究開発法人国立環境研究所・理事、1F 廃炉の先研究会・副代表)

報告1:「話せばわかる、話せば変わる:いわきを越えた学びを通して」

渡邊光季(福島県立ふたば未来学園高等学校・未来創造探究プロジェクト・高校3年)

報告2:「1F 廃炉の先研究会の活動について」

崎田裕子(NPO法人・持続可能な社会をつくる元気ネット・前理事長、1F 廃炉の先研究会・副代表)

報告3:「1F 廃炉の先と地域社会:カナダの経験から考える」

長崎晋也(カナダ・マクマスター大学工学部・教授)

討論者:高橋洋充(福島県立福島東高校・教諭、1F 廃炉の先研究会、浪江町出身)

溝上伸也(東京電力廃炉カンパニー燃料デブリ取り出しプログラム部・部長)

(お昼休み:12:35-13:30)

【第2部 福島浜通り地域社会の将来像を考える】 13:30-15:20

司会:林 誠二(国立環境研究所福島地域協働研究拠点・研究グループ長、創造的復興研究会・副代表)

報告1:「ひとりひとりが取り組む防災」

三村咲綾(福島県立ふたば未来学園高等学校・未来創造探究プロジェクト・高校3年)

報告2:福島浜通り地域の産業経済の将来像を考える

島田 剛(明治大学情報コミュニケーション学部・准教授、創造的復興研究会・主査)

報告3:福島浜通りの復興事業と地域社会の将来像を考える

徳田辰吾(株式会社ネクサスファームおおくま・取締役兼工場長)

討論者:齋藤真緒(大熊町出身)

高原耕平(人と防災未来センター・主任研究員、創造的復興研究会)

遠藤秀文(株式会社ふたば社長、創造的復興研究会、富岡町)

(休憩:15:20-15:30)

【第3部 グループ討論】 15:30-16:50

6グループ・司会

朱 鈺(早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・博士課程)

松川希映(早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・修士課程)

田代滉介(早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科・修士課程)

倉重水優(早稲田大学政治経済学部・3年)

高垣慶太（早稲田大学社会科学部・2年）  
馬屋原瑠美（早稲田大学社会科学部・2年）

**【第4部 総括セッション】 16:50-18:15**

**司会**：菅波香織（未来会議事務局長、弁護士、1F 廃炉の先研究会）

**パネリスト**：南郷市兵（ふたば未来学園・副校長、創造的復興研究会）

渡邊光季（福島県立ふたば未来学園高校3年）

小泉良空（一般社団法人ふたばプロジェクト：双葉町、富岡町在住、大熊町出身）

山田美香（早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター・次席研究員）

**【閉会】 18:15**

## 【開会挨拶】

松岡 俊二

(早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター・センター長、早稲田大学レジリエンス研究所・所長、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・教授)

福島県富岡町の山本育男町長と広野町の遠藤智町長におかれましては、ご多忙の中にもかかわらず、丁寧な開会のご挨拶をいただき誠にありがとうございます。

第 10 回ふくしま学（楽）会の開催にあたり、主催者を代表して、開会への思いをお話ししたいと思います。

2018 年 1 月 28 日の第 1 回ふくしま学（楽）会の開催から、世代を超えて、地域を超えて、分野を超えて、福島における復興と廃炉を共に考える「対話の場」＝「学びの場」の形成を目指して、半年に 1 回のペースでふくしま学（楽）会を開催してきました。今回、第 10 回ふくしま学（楽）会という一つの大きな節目を迎えることが出来たことを、日本や世界の福島へ心を寄せる多くの皆さんに感謝し、共に喜びたいと思います。

さて、第 10 回という節目にあたり、福島の災害と復興の原点について、福島原子力災害とは何かについて改めて考えたいと思います。昨日、久しぶりに双葉町の東日本大震災・原子力災害伝承館を、研究室の学生と訪れました。今回、強く感じたのは、この施設、この社会装置は、福島原子力災害の何を伝承したいのか、福島から世界へのメッセージとして何を発信しているのか、という大きな疑問であり、大きな問いです。

私は、広島で 20 年暮らし、広島で家族を作りましたが、広島を離れて東京に移って、はじめて、広島の世界平和への誓いや核兵器のない世界の実現へのメッセージを深く考えるようになりました。人類史上初の被爆地・広島の発信するメッセージに対する私自身の想いは、私が、この 11 年間、福島の復興や廃炉の問題に取り組んできたからこそ、生まれてきたものです。

もちろん、広島と福島は問題の構造も歴史的背景も大きく異なり、簡単に比較できるものではありません。しかし、広島の問題は、日本の問題であり人類の問題です。福島も問題もまた、それは福島だけの問題ではなく、日本の問題であり人類の問題です。

私自身は、福島原子力災害は、「核の世紀」と言われる 20 世紀の科学技術のあり方や科学と政治と社会のあり方への根源的な問題提起であったし、こうした根源的な問題として把握することではじめて福島のメッセージは明確になると、この 11 年間、考えてきました。科学と政治と社会が分断されている限り、福島の悲劇は繰り返されます。だとするならば、科学と政治と社会との新たな協働関係をつくるため、科学者・専門家も、政治家や行政担当者も、事業者も、市民も、地域住民も、お互いが何を大切に、何をリスクと考えているのかを相互に理解する能力であるエンパシーを身につける必要があると、この 11 年間、考えてきました。

「他者の靴を履く」能力としてのエンパシーには、まずは「自分の靴を脱ぐ」能力が必要です。自分で自分の靴を脱ぐためには、安全に自由に靴を脱げる「場」（サンクチュアリ）づくりが不可欠です。本年 7 月 16 日にスタートした 1F 地域塾はこうした挑戦の一つです。本ふくしま学（楽）会も、多様な意見をお互いに尊重し、お互いを理解する「場」づくりへの挑戦です。こうした多様性を包摂した寛容な地域社会づくりこそ、21 世紀に必要な持続可能な地域社会のあり方であり、福島復興が目指すべき将来像です。

是非、本日の第 10 回ふくしま学（楽）会では、こうした点も含めて、自由闊達に、結論を求めないオープンエンドな議論を展開してください。また、今回の第 10 回を一区切りとし、ふくしま学（楽）会の開催のあり方やデザインについても見直しを行い、「対話の場」＝「学びの場」やエンパシー能力の形成に繋がる「場」のデザインを工夫していきたいと思えます。

本日は夕方 6 時までの長丁場の「対話の場」＝「学びの場」となりますが、何卒、よろしく願います。

## 第 1 部 1F 廃炉の先を考える

### 【報告】

(報告内容については、報告資料をご参照ください)

#### 報告 1 「話せばわかる、話せば変わる:いわきを越えた学びを通して」

渡邊光季(福島県立ふたば未来学園高等学校・未来創造探究プロジェクト・高校 3 年)



#### 報告 2 「1F 廃炉の先研究会の活動について」

崎田裕子(NPO 法人・持続可能な社会をつくる元気ネット・前理事長、1F 廃炉の先研究会・副代表)



#### 報告 3 「1F 廃炉の先と地域社会:カナダの経験から考える」

長崎晋也(カナダ・マクマスター大学工学部・教授)



## 【討論】

司 会： 森口祐一（国立研究開発法人国立環境研究所・理事、1F 廃炉の先研究会・副代表）

討論者： 高橋洋充（福島県立福島東高校・教諭、1F 廃炉の先研究会、浪江町出身）

溝上伸也（東京電力廃炉カンパニー燃料デブリ取り出しプログラム部・部長）



高橋： 原発事故後、与党自民党を支持してきた父は、そのことを後悔していると言っていた。私も原発事故が起こるまで私自身が思考停止に陥っていたことを悔いている。現在の赴任校、福島東高校において、原発事故を考えるという探究授業を行っており、本年度は、「他人の靴を履いてみる」試みとして、汚染水・処理水・トリチウムをテーマにし、経産省と漁師（新地町）の方々の話を聞いた。授業後のアンケートでは興味深い結果と感想があったが、時間の都合上全部紹介できなくて残念である。今後の予定としては、10月に松岡先生（早稲田大学

教授）、宮本先生（デュポール大学教授）による講話を計画している。

本日は、次から次に問いが生まれていく「問いの連鎖」が大切であると感じた。また、自分の言いたいことを子どもたちに言わせないように気を付けたい。子どもの話を聞くことは重要であるが、「言わせて」はいけない。学ぶことは変わることであり、高校生だからこそ言えることに、大人たちが耳を傾け、気づき、変わるのである。

溝上： 原発事故前に私は1Fに関わっていなかったため、自分にとって1Fは事故で破損したプラントというマイナスからスタートし、廃炉作業が進むにつれてだんだんゼロに近づいていくものである。しかし、多くの地元の方々にとっては、電気を供給していた1Fが多かれ少なかれご自身の一部となっていたと思う。そういった存在が事故によって大きく変化し、大きな穴があいてしまったような感覚だろうと考える。私は事故分析によって廃炉作業の完遂に貢献するしかできないが、廃炉の成し遂げが地元の方の誇りにつなげられるのか否か、悶々と考えている。



なお、2020年4月から日本原子力研究開発機構（JAEA）の研究員を兼務することとなった。アメリカ・TMI-2の廃炉において、GNED協定によって、国の規制機関や事業者、研究者がワンチームとして対応していた。それを考えると、JAEAが東電のために自分のできることをだけをしてあげると言われることにもややもやと感じる。昨年にはJAEA/CLADSから廃炉に際して案内人の役を担うとの意思表示があった。今後、自分が東電とJAEAが協働するためのかけ橋の役割を果たしたい。

崎田： 渡邊さんのご家族が、今住んでいる場所の放射線量が少し高いことに不安を感じていると聞いていたが、今日の報告で、渡邊さんが家族といろいろな話をしていて、家族にも積極的な変化をもたらしたことを知って、大変感動した。大人たちは廃炉や放射線についてなかなか話す機会がないのではないかと思う。自分の両親の世代にどのように話したり情報を届けたりすればいいか。

渡邊： 自分から家族にも話そうと思うようになるまで時間がかかったし、悩んでいた。しかし、ふたば未来学園に進学したからには、他の高校生ができないことがしたいと思った。いわきの家族・友達と地域の方々の間にいる私が話さないと、分かる人がいないと思うから、双葉郡のことを話すことにした。大人たちとの話し方は私も悩んでいた。大人は自分の経験で先入観があり、考え方を変えることが難しいが、子供が毎日学んだことなどを話題に、家族や身近な人に話すことができる。

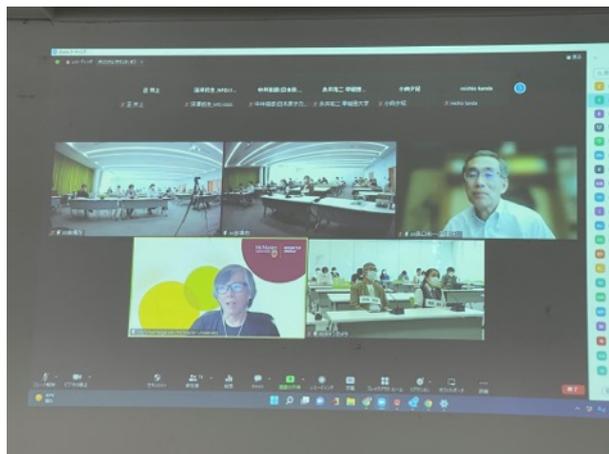
長崎さんの報告を聞き、「話す・変わる・分かる」に関して、社会的弱者との話し方を考える必要性を感じた。ところが、人はよく身近な人に話を聞くが、他のところに耳を傾けるきっかけづくりはどうすればいいかを伺いたい。

**長崎**：カナダに来た日本人の大学生は関心の幅が狭いと感じているが、ふたば未来学園の生徒はいろいろなことに興味を持っている。話すことが第一歩であるが、ひたすら価値観を相手に押し付けようとするれば、相手に絶対に聞いてもらえない。お互いに対等な立場から話し合うことが大事である。カナダの事例では、白人優位の社会的構造がコミュニケーションにも反映され、最後の失敗を招いた。カナダの教訓を踏まえ、日本の場合でも、「社会的勝者と弱者の間の話」にならないように、対等な立場で互いに考え方を共有することから始めるのが第一歩であると思う。

**森口**：私もふたば未来学園の生徒さんの広い視野に感心した。それはふたば未来学園だからできているのか、どう広がっていくか、いろいろな課題がある。

**高橋**：渡邊さんが指摘した「変化」について、アンケート結果では、予算の話聞いた後に海洋放出に反対の意見が増え、経産相の話聞いた後に賛成派が増えた。話を聞いた直後に明らかな変化があったので、話の順番を変えたらどうなるかと考えた。また、1回目のアンケートの回答者はほぼ全員参加の223名、2回目は166名、3回目は137名であった。回答者数が毎回違い、単純に比較することが困難であった。もし回答者数が全て同じであったら、有意な変化が見えたのではと悔しい思いである。

しかしながら、「変化」を考えると、何も勉強しなかった1回目、漁業者の話聞いた2回目、および経産省の話聞いた後の3回目、その都度変化をしているのだろう。先ほど、以前自分の思考停止を後悔していると言った。渡邊さんには是非、考え、変化することを続けていただきたい。



**溝上**：私として一番悔しいと思ったのは原子カムラから感謝報恩が出ないことである。原子力学会の人とお話した際に、「東電さんよくしていると思うが、なかなか表向きには言えない」という話を聞いた。それは廃炉を良くするのかと率直に感じた。

**崎田**：第1部は「1F 廃炉の先を考える」というテーマであるが、「先」を考えるために、「今」をきちんと一人ひとりが納得する必要がある。先ほどの議論では、廃炉や燃料デブリの処分、廃棄物の処分などいろいろなキーワードが出てきた。そういう普段口に出さないことをこの場では口にしながら、ちゃんと「今」を話している。それは、ふくしま学（楽）会のような場の大きな意義である。

**一般参加者**：長崎先生に質問がある。報告で「話し合うことで合意するのは妄想なのでは」という発言があったが、刺さったように感じた。福島の問題だけでなく、いろいろな問題について誰でも議論が必要だと言っているが、インターネットなどを見たら喧嘩ばかりで全然議論になっていない。私は諦めるべきかとも思ったことがある。それについてどう思うか。

**長崎**：非常に重要な質問である。私は答えを持っていないが、とりあえずアイコンタクトしながら、話すことが第一歩である。ただし、話の仕方、設計はいろいろな工夫が必要になる。今まで関係者しか集

まらないことや、そもそも参加者が集まらないなどの問題があるが、その中でいかに話をしていくのかを考える必要がある。喧嘩になる場合もあるが、違う意見の存在を知ること自体も大事である。さまざまな意見を上手にまとめないといけないと忖度するのが日本の問題点であるが、今日この質問が提起されたことで、次世代の活躍を期待するようになった。

## 第 2 部 福島浜通り地域社会の将来像を考える

### 【報告】

(報告内容については、報告資料をご参照ください)

#### 報告 1

「ひとりひとりが取り組む防災」

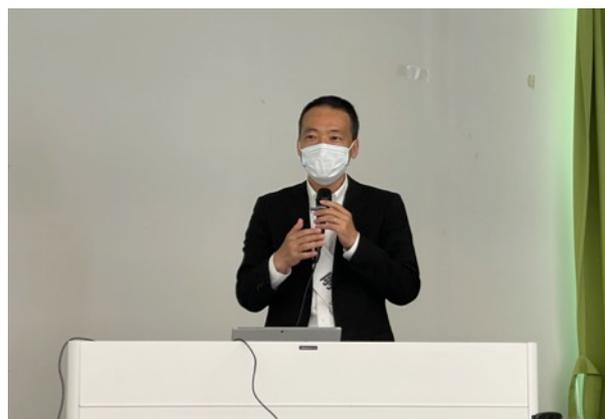
三村咲綾(福島県立ふたば未来学園高等学校・未来創造探究プロジェクト・高校 3 年)



#### 報告 2

「福島浜通り地域の産業経済の将来像を考える」

島田 剛(明治大学情報コミュニケーション学部・准教授、創造的復興研究会・主査)



### 報告 3

#### 「福島浜通りの復興事業と地域社会の将来像を考える」

徳田辰吾(株式会社ネクサスファームおおくま・取締役兼工場長)



#### 【討論】

司 会：林 誠二(国立環境研究所福島地域協働研究拠点・研究グループ長、創造的復興研究会・副代表)

討論者：齋藤真緒(大熊町出身)

高原耕平(人と防災未来センター・主任研究員、創造的復興研究会)

遠藤秀文(株式会社ふたば社長、創造的復興研究会、富岡町)

齋藤：私は生まれてからずっと大熊町に住んでいる。大熊復興のために伝承活動をしてきたが、伝承活動の意味、そして自分の大熊町出身の意味を考え直したいため、今大学を休学して、全国各地を旅している。

#### (1) 本来あるべき開発・イノベーションの姿とは

自分的には、開発やイノベーションが自分の町を壊すものというイメージしかない。私は元々会津若松の仮設住宅に住んでいたが、東京オリンピックの開催年に仮設住宅が全部壊されてしまった。避難者のみなさんが家を建てるまでそこに住めると言われたが、オリンピックで「復興」を世界に発信するために、自分の家が壊されたようにしか考えられない。だから、開発やイノベーションに対するイメージが悪い。その本来あるべき姿とは何か。

#### (2) 伝承と開発・イノベーションは相容れるものなのか

私は大熊復興のために伝承活動をしてきた。つい最近大熊町にある図書館が解体されることが決まった。町役場はお金の問題や大熊町の復興計画がこうだからなどと説明したが、「開発」があるから大熊町の思い出を残すことができなくなったと思ってしまった。伝承と開発、イノベーションは相容れるものなのか。

#### (3) 開発・イノベーションは震災前に住んでいた住民を視野に入れているのか

開発やイノベーションの計画に地元住民を視野に入れているのかが気になる。どうせ帰ってこないから、新しい人に移住してもらうために、過去の思い出の場所を壊すという感じがする。それを見ると、虚しくなる。もちろん新住民が入ってくるのは嬉しいが、元々ここに住んでいた人の気持ちを考慮しているのか。



林：地域には復興をポジティブに思っている方もいれば、齋藤さんと同じ考えを抱える人もたくさんいる。ふくしま学(楽)会はこういう話を言う非常に良い場である。ぜひみなさんに齋藤さんの疑問を議論していただきたい。



**高原**：阪神地域の震災の記憶伝承や災厄の被災地の「精神的再形成」が私の研究課題であり、今福島について 1F の世界遺産化も議論している。広く言えば、「物語と未来」が研究テーマである。

なぜ 1F を遺構化するかというと、遺構が原発災害の「証人」として、科学技術社会の一つの「結果」を体現でもあるし、複雑な廃炉プロセス自体の稼働遺構でもある。また、1F 遺構が伝承と精神的再形成の原点としての役割もある。例えば、広島の被爆者の語りでは「私は投下地点から半径何メートルいた」が共通する部分である。1F 遺構も現在と未来の物語の原点になるだろう。もう一点、未来世代の財産にもなる。長崎浦上天主堂は残すかどうかの議論を経て、結局解体された。遺構は未来世代にとって未来人たちの「現在の複合課題」の象徴として、やはり必要である。

参考事例として、広島市の旧陸軍被服支廠の保存経緯を紹介する。広島県が 2019 年に 3 棟中 2 棟を解体、国も 1 棟を解体の方針であった。しかし、市民団体の保存運動により、2022 年 5 月に全 4 棟の保存が決定された。

**遠藤**：私は 3 つの論点がある。

#### (1) 原発被災地域における復興プロセスでの地域社会との関わり

福島イノベ機構が今いろいろな復興プロジェクトを行っているが、その決定プロセスに地域住民がほとんど関わっていないことを危惧している。そういう霞が関に勝手に決められたことに対し住民は関心が薄い。TMI-2 の廃炉の先行事例における地域諮問委員会のような、住民が主体的に参加する仕組みづくりが必要である。



#### (2) 地域の歩むべき方向性

地域の広域連携、まちづくり、基幹産業の創出等の見通しが立っていない。電力産業が育った地域だからこそ、未来志向の電力産業を発展することも一つの視点であると思う。また、廃炉に使用される遠隔技術などの先端技術、計測・解析技術がより広範な分野で活用されるのを期待する。マクロ的な視点でのビジョンづくりや、国家プロジェクトとしての位置づけ、意味づけを明確にすることが大事である。町村単位でなく、地域全体として目指すべき姿を考える必要がある。

#### (3) 地域の価値を考える

1F は後世にどのような形で伝えるべきか。1F が福島「これまで」と「これから」における 1 丁目一番地である。1F があったから福島が困難に遭ったが、その困難をまた乗り越える中からイノベーションが生まれてくる。広島原爆ドームは残したことで世界遺産という大きな存在になり、平和のシンボルになっている。では、福島「未来志向」のシンボルキーワードとは何か。地域を俯瞰し、後世に残すべきものや新たな価値を冷静に検討する時期が来ていると考える。

**林**：齋藤さんから、開発とイノベーションの本来あるべき姿と何かについて、伝承と開発、イノベーションの関係、開発とイノベーションに地域住民の視点を入れているかという、いくつかの重要な論点をいただいた。みなさんの意見を伺いたい。

**島田**：なかなか難しい問題だ。先ほど遺構の保存については、文化と費用面のバランスをどう取るかが一番大切である。経済優先か文化優先か、それは地域社会で対話によって決めるしかない。長崎先生の報告のように、理論だけで通じない部分もあるから、対話を重ねることで納得度を高めるのが重要な第一歩だと思う。残すと決めたら、次に保存のための費用を集める工夫が必要だ。文化と経済の両立ができれば、残したものがその地域の中心的な部分にもなってくるだろう。

**遠藤**：同じく地域に生まれ育った私は齋藤さんの悩みをとっても理解できる。故郷の景色がどんどん変わっているのを見て、寂しいと感じている。私はできるだけ残せるものを残したい。データを残して後世

に伝える方法もあるが、リアルなものが大事である。先日中間貯蔵施設を見学した。あのエリアは町並みがまだそのままの状態である。チェルノブイリの場合でも、その周辺の町並みがそのままの状態で見学されている。多重災害という唯一無二の問題が受けたこの地域を国内外の「学ぶ場」として保存したら良いと思う。

**林**：伝承と開発、イノベーションの関係について、阪神淡路大震災の経験等を踏まえながら、高原さんはどう思うか。

**高原**：「伝承」というのは単純に情報を知らない人に覚えさせるのではなく、物語の連鎖である。私の話を誰かに聞いてもらい、そこからまた伝わっていく。物語を可能にするために必要なものと言えば、いろいろな風景や町並み、あるいは昔友達とどこにいて何をしていたなど、つまり背景の環境も含めて物語が伝承していく。開発とイノベーションはこの背景をどう支えるかがポイントの一つである。逆に言うと、地域住民も参加して、一緒に何か作るような開発の仕方であれば、それも伝承や物語を支えていく。

**林**：先ほど遠藤さんからも復興のプロセスには地域住民がほとんど関わっていない問題点が提起された。伝承と開発、イノベーションが相容れるものかについて、地域住民が何かの形で設計に関わることによって、それが伝承と開発イノベーションをつなげるのではと思った。また、今遠藤さんの1Fや周辺の町並みを残すという提案に対し、一般参加者から危険性を懸念するコメントがあった。それについてどう思うか。



**遠藤**：全てを残すわけではなく、地域の将来の姿を考える上で、何を残す、どのように残すかを決めるわけである。今は残すかどうかということ自体はまだ議論されていない。全部解体されたらもう遅いから、そろそろ検討する必要がある。広島の前爆ドームは「平和」をキーワードとしているが、福島のキーワードとは何かも考える必要がある。キーワードを見つければ、残す意義が見えてくるだろう。その意義は地域だけでなく、世界的な目線で考えることも大事である。保存したら維持補修でお金はかかるが、そのシンボルとしての価値がそれを上回れば、地域の財産になる。

**三村(高校生)**：いわき出身だが、ここにあった建物がなくなったことに寂しいと感じる。私が小学校の時は、双葉郡は危険なイメージがあって近寄れない地域であったが、最近、茨城の私立小学校の子供たちが双葉郡に見学に来ている様子を見て、「時代が変わったんだな」と思い、感動した。地域の建物は、地域の中心という意味もあり、地域外の日本や世界の人たちにとっても重要である。

**齋藤**：対話が大事であることは分かるが、対話に対するイメージが悪い。先ほども話したが、図書館を残したいとどれだけ言っても、既に決まっている復興計画などの理由があつてどうしようもない。復興のためにスピードの速い開発が進んでいる。開発があまりにも速すぎて、対話する時間すらない。対話

の場があっても、もう最終的にイエスしか言えない状態になっている。それゆえ、対話に対して良いイメージを持っていない。対話の仕方を勉強したい。

**林：**それは対話になっていなく、何か説明会のような感じである。地域の人たちもより主導的に声を上げていくような姿勢や気持ちが必要なのではと個人的には思う。

**島田：**対話の話について、公共事業は中央主導が多い。お金の使い方も、福島だけでなく、日本全体でなんとなく今の政権党の主張を聞かなければいけないような雰囲気がある。福島はその感じがさらに強い気がする。そのため、「対話」は政治家がイエスを聴取するための場になっている。それはまたお金に結びついているので、お金の問題と同時に扱うのが非常に難しい。問題を認識することが問題解決の第一歩であると考ええる。なお、徳田さんの紹介したイチゴ産業による復興プロジェクトについて、起業中の難しい点、どんな支援が必要だったのかを教えてください。

**徳田：**同じような金額をかけて産業を作るのが不可能であろう。今の施設は 20 億円で建てたが、民間の会社でイチゴ産業を始める場合、初期投資 8 億円ぐらいで採算がとれるだろう。あの施設で操業していくことを考えると 15 億円ぐらいかかる。あとは、技術である。例えば、農地をどう集約するか、働き手はいるのか、日本の人口が減っている中で、私たち事業者として、そういうことをまずテーブルに載せなくていけない。また、夏のイチゴだからこそ地域に広げることが可能なこともあり、他の商品は厳しいと思う。国内で夏のイチゴが希少なので、そこに価値がある。

### 第 3 部 グループ討論

#### 【A グループ】

- ・イノベーションと地域の伝統の関係、復興計画や地域の復興政策を策定する中で地域の参加が少ないことを感じている。
- ・原発の廃炉や復興に関して、発信不足の問題が挙げられた。地域住民に今どういう取り組みを行っているのか伝わっていない。発信不足であるため、行政側も原発の廃炉や復興についてどれだけ理解しているかを把握しにくい。また、住民同士においても、これらの話題を議論する空気感がない。
- ・それらの問題点を克服するために、対話が重要である。ただ、対話がただ説得し、「Yes or No」を答えさせるためのものではないことを注意しなければならない。お互いの考え方を学び合うために対話するのである。
- ・言葉で表現できない部分は、アートや文化という新しい方式でも表現できるのではとの意見もあった。

#### 【B グループ】

- ・これまで「対話になっていない対話」をしてきた。参加者の構成などを考慮した上で、対話プロセスを設計することが大事である。
- ・対話をするには、信頼関係の構築が重要である。話しあうことで信頼関係が生まれ、対話が自身の考え方や感情を変えるきっかけにもなる。
- ・福島復興は福島だけで終わる問題ではなく、福島で経験したことを全国的・世界的に発信していくことが必要である。今後日本のどこかの地域で同じ問題を抱える可能性があることから、福島の教訓・学びを見なおし、発信することが求められる。

#### 【C グループ】

- ・放射線を中心に、「安全」と「安心」を議論した。事故、放射線被害や対処法について十分な情報共有が行われていないと感じている。また、不安の解消にも気を配る必要がある。安心・安全については、過度な心配と片付けられる問題ではないのではないか。

- ・地元の参加者には家族が東京電力の関係者の方がいた。放射線や原発事故に関する情報に触れにくい気持ちであるが、自分の中で相反する気持ちがあると述べられていた。
- ・震災遺構の保存は、そもそも結論ありきの議論なのではという疑問があった。住民が避難している中で、行政側と住民側でラグが生じ、コミュニケーション不足が起こっている。
- ・解体や地域自体が塗り替わっていく中で、元々そこに住んでいた避難中の人々にとって、そこが帰る場所ではなく、復興しに行かなければならない、頑張らなければならぬ場所になってしまっていると感じる。

#### 【D グループ】

- ・事故処理を早くしたい気持ちがあることから、逆に勝手に処理されてしまうという危険性がある。そのため、何を残すべきかを知るために、住民側から声をあげる必要がある。その一方、期限がある中で、全員から賛成を得て進めていくことは難しい部分もある。どのようなスピードで、どのような人が、どこまで残すか、全体で話しあう必要がある。
- ・1F 廃炉は全体像が見えづらい課題がある。廃炉の過程を地域住民に伝えることは大切だと分かっているが、目の前の業務に追われていたり、3年に1回東京電力の中で部署が入れ替わったりするため、担当者も地元住民と同様に全体像が分からない。
- ・高校生は震災や事故を覚えていなくて、立場を持たずに話を聞くことができることが、対話の鍵となるのではないか。
- ・生業を奪われて新しい産業を作ることになるとしたら、生業は貨幣で置き換えられることが前提なのではないか。
- ・経済成長だけが重要なのではなく、生業が生まれて地域が盛り上がっていくような連鎖が必要である。

#### 【E グループ】

- ・記憶を風化させないために何をすればいいか。富岡町は今避難指示が解除・緩和されてきている中で、目に見える以上のインパクトを持つものは何か。それをどのように伝えればいいか。伝承と開発の両立は難しいと感じる。
- ・地域開発が住民に知らないままで進められている。対話の前提は住民の納得であるべきだと考える。
- ・残る遺構が住民の心を痛めないのかという質問があった。一方、遺構がなくなると分からなくなってしまう可能性もあり、遺構を通してメッセージを伝えられるのではという意見もあった。
- ・地域で新しいイノベーションを起こすだけでなく、どのように震災前の町の記憶を伝えるのかを考えていくことも求められる。

#### 【F グループ】

- ・地域住民が廃炉に関わっていないことが課題であり、住民の間でも話しやすい雰囲気を作ることができていない。話したいという気持ちがあっても、11年前原子力発電所から恩恵を受けている人もいるからこそ批判しにくい。結局、話さないのが最善策になってしまっている。また、発言する場に出ても、録音されることを気にして、話すことができない人もいるのではとの懸念もあった。
- ・原発の将来像というより、浜通り地域の将来像として捉えたほうがいいのか。
- ・よそ者（地域外の人）は地域の人と利害関係が異なることから、地域内外で議論することが難しい。無理に地域住民を誘うのではなく、よそ者が議論していることを地域の人に知ってもらうことだけでも十分なのではという意見も出た。

## 第4部 総括セッション

司会：菅波香織（未来会議事務局長、弁護士、1F 廃炉の先研究会）

パネリスト：南郷市兵（ふたば未来学園・副校長、創造的復興研究会）

渡邊光季（福島県立ふたば未来学園高校3年）

小泉良空（一般社団法人ふたばプロジェクト：双葉町、富岡町在住、大熊町出身）

山田美香（早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター・次席研究員）

南郷：ふくしま学（楽）会の議論が2つの話題に収斂されてきたと考える。1つは、「2050年を目指した地域の将来像を考える」であり、もう一つは「後世に何の教訓をどのように伝えるべきなのか」である。これらの問題の根源には、科学・政治・社会の分断がある。11年経ったからこそ、以前より踏み込んで語るができるようになったのではないかと考える。

今までの議論で対話の重要性が強調されていた。意思決定プロセスでは住民の不在という問題点が提起され、また、住民に教える姿勢で結論ありきの「対話」をしてはならないという意見も出た。菅波さんによる「答えを共有しようとすれば信頼が崩れ、問いを共有しようとすれば信頼が生まれる」という観点が見えてきたと思う。

東電、地域、国を繋ぐ参加型の場づくりについて、渡邊さん提案した「話す→分かる→変わる→動く」というサイクルが対話を契機に回していくことが重要である。

対話は主体性の獲得や自立した地域の実現するための活動である。ふくしま学（楽）会は専門家、地域、若者、アーティストなどの多様な人々が、違いを超えて境界知を創造し、創造的な地域を実現するための重要な場になっている。

渡邊(高校生)：グループ・ディスカッションで、今対話する人自体も双葉郡にいなくなって、対話ができなくなっているという点が印象的であった。今後の進学の中で、「基盤づくり」を考えていきたい。

地域間の壁をどのように乗り越えるのか。震災から10年以上経過した今でもデリケートな部分があると感じている。その中で、大人が今まで何の活動をしてきたかを見直したい。また、高校生だから評価されていると感じることから、高校生ブランドだけにとどめずに、社会に出たら自身の考えがどれだけ必要とされているのか、どう活かすのかということも考えていきたい。

菅波：渡邊さんの話を聞いたら、「自身も変わることができるかも」と感じた。家族に話すハードルはかなり高い。学んでいることを身近な人に話すことができているため、家族に話したいと思った。

小泉：先日、東京の高校生20名でワークショップを行った。福島復興を自分事として捉えたり、持ち帰って考えたりできるようになれば良いと思う。その際に、福島県産の食品に対しても、自分で自分の意思を持って判断するのであれば、食べても良いと思うと高校生が述べていた。高校生が自分なりの意見を持てるようになることに喜びを感じた。

現在、双葉の駅前が整備されてきているが、町民の方が、駅前がきれいになって知らない町に来たみたいとなんだか寂しく言っていた。開発と伝承の関係は、避難先にいる人と地域にいる人の意識の差を感じている。

同級生とも気兼ねなく大熊町のことを言えなくなっている。住んでいたところの線量がそこまで高くなかったことから、希望を持ちながら帰りたいと思いつけることができた。自身はかなり恵まれた立場だったと感じる。

町民の中でも意識の差がある中で、地域のこれからと町民の想いをどう繋げるかをみなさんと議論したい。

山田：三村さんの報告で、防災で何が大切かを考えると、まず自助が大事であるという話があった。自分が自分の身を守らなければ他の人も助けられない。そうだとすれば、一人ひとりの幸せを追求する中

で、共助や公助につながるのではないかと考える。個人の幸せが地域の営みに代わり社会に反映されていくのだろう。

また、高橋先生の「思考停止」の話から、考えることが大切だと強く感じた。結局のところ、「結論ありきの対話」の違和感を打破するのも一人ひとりであり、対話の前にすることがあると思う。

**菅波：**本日の議論では難しい・悩ましい点が多かった。例えば、結論ありきの対話や、違和感を口にしたくない雰囲気、気兼ねなく大熊のことを話せないなど、タブーを話しにくい雰囲気があることが挙げられる。その点に向き合わなければ、前に一歩進みにくい。

対話の環境整備について、話したくない人や参加しようとしのない人に対し、対話の場に出てほしいと押し付けてはならないという意見が出たが、一方、そういった人々の想いを置き去りにしてはならない。先ほどの想いを繋げる難しさという話もあった。これらの点は山田さんの「対話の前にすべきこと」に近いと考えられる。

**南郷：**気兼ねなく話せないことや、地域の壁を越えるにはデリケートな部分があることが印象に残った。大人は立場によって発言が憚られる部分があるが、この場に中高生や大学生が参加している意味は、対話のみならず、一線を踏み越えて行動できることである。若者やアーティストは、世の中の大人が何を考えているかを観察している。そして、口をつぐまずに問いを発する。未来世代の代表として参加し、将来の主体となっていく。このようなサイクルの形成が重要なポイントである。

参加しても聞いてもらえない、参加したことで何かに加担させられるかという警戒感を抱く方もいるかもしれない。そのため、学会という形ではなく、アートや文化などといった別の形で、幅広い人に問いを共有することもあり得るのではないかと思う。



**渡邊(高校生)：**対話を通して信頼を築くことは大切であるが、それと同時に信頼を築いてから対話することも必要である。学校での信頼できる友達と、避難中の感覚やところの中の偏見を伝えることができた。それも対話を実感したきっかけの一つになった。

「エネルギー館」が「廃炉資料館」になったことが一番壁を感じた瞬間であった。映像を見た時に、自分自身が以前双葉郡の人に対して考えていたことが、間違っていたと分かった。そこは「偏見」を初めて実感した場所であった。

活動や自身のことを伝えることから逃げていたと感じたため、今後は友人に紹介していきたいと感じることができた点が、新たな友達との関係の中の変化につながるのでは、と感じている。

**小泉：**話のタブーは同級生が発信する中からも何度も感じた。自分は大熊出身で大熊に戻りたいことを隠さずに言うようにしてきたが、社会人一年目の時に、大熊町出身だと自己紹介したら、そこはもう住めないのではないかと聞かれ、ショックだった。また、みんなが帰りたいのは震災前の大熊町であり、

今の熊野町ではないと言っている友人もいる。熊野についてどう思うか、帰りたいかという問題は自身もうまく整理できていないと感じた。

人によっては、書くことが得意だったり、雑談でないと言えなかったりすることが多いかもしれない。「意味のある対話」を実現するため、ハードルの低い入り口を作ることが大切である。人々が自分なりの距離感で関わることができたら良い。

**菅波**：ふるさとへの愛は一人ひとり持っているが、イノベ機構やまちづくりのプランによって、愛が零れ落ちてしまうことがある。ふるさとへの愛を大切にすることで、話していけると良いと改めて感じた。

**山田**：対話の場に出向くことができない人や自分の意見を言えない人が大勢いるのを地域に入って歩き回らる中で実感している。そういった人々には、私たち自らが足を運び聞きに行かなければならないし、聞いた声を伝えていくこともしなければならないと感じている。

**齋藤**：今日の議論から、自分自身も自分の靴を脱げていないと感じた。町の人、人の話を聞いてくれないと言っているが、町民も他の町民のまちづくりの話聞いていなかったのではないかと思う。また、どこの出身にかかわらず、その人の感情や考えを受け入れ、みんなで共有する場が必要であると思う。

**一般参加者**：大事な話をする事なく過ごしていることが日常である。家に帰って家族に今日の話を話したいと思うようになった。ふくしま学（楽）会は自身に変化が起きた場であると感じた。

**南郷**：ふくしま学（楽）会は重大な課題を明らかにしたと感じているが、政策の決定プロセスに住民が入れないのは、無力感の原因の一つである。個人が靴を脱ぎ切れていないわけではなく、より構造的な問題があると考えている。

エンパシーによって自分が変わるだけでなく、社会も変えなければならない。政策決定の変化と、個人が対話を通して学んだことは断絶してはならない。復興、廃炉、政策にはふくしま学（楽）会のような対話の場がどのように影響を及ぼすかを考えるべきである。ふくしま学（楽）会は世の中の課題を明らかにする問診型の熟議であるように感じるが、政策決定や復興、廃炉のあり方に影響を及ぼすために、社会の理想像を検討する目的検討型、目的構想型の熟議の場も必要であるとする。

場づくりにおいて、専門知・地域知・若者の3つの要素がどういう関係なのかを考える必要がある。今は大学主催の場で対話を行っているが、住民側、若者側、学校側がともにイニシアチブを持つ仕組みができれば、内発的、かつ持続可能な場になるだろう。以前のふくしま学（楽）会では、対話は主体性を発揮し、自律した地域を創るためのものであると指摘されてきた。イニシアチブのあり方も重大な課題である。

**菅波**：一人ひとは国の主権者である。本日の議論を聞き、「変わった・分かった」で終わらず、動きだすまで考えていく必要がある。

以上